

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：宮古市立田老第一中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校では、東日本大震災において、全校生徒 80 名のうち 36 名、45%が震災の被害を受けた。地域としても大きな被害を受けており、震災から 7 年経った今でも住居や仕事に影響を受けている家庭も多い。そのため、保護者の生活環境や心の状態に影響を受ける生徒も見られる。また、現在の生徒は震災当時、小学 1 年～保育所年中という年代であり、当時の記憶がほとんどなかったり曖昧であったりする生徒がほとんどである。

これらの現状を踏まえて、今年度は学校経営の基本理念「田老一中『復興教育（7年目）』～自ら、学び、伝え、活かす人づくり」のもと、以下のような視点をもって復興教育を計画、実践した。

・目指す生徒の姿：震災の教訓に学び、夢や目標に向かって“自分から”考え、行動できる生徒。

- ①震災を知り、改めて震災を捉えなおすこと
- ②防災・復興に向けて自分たちがすべきことを考えること
- ③学んだことを、自分たちのことばでまとめ、伝えていくこと
- ④実際に学んだことや自分たちの願いを言葉で終わらせず、学校生活を中心とした実生活の場に置き換えて実践させること

震災から 7 年という年月が流れ、生徒の記憶に頼った復興教育は曲がり角に来ている。指導する側の教員も改めて震災について学びながら、復興とは何かを考えていかなければならない。

II 取組の概要**(1) 震災講話**

視点①②に関わる学習活動である。本校では毎年、1 年生を対象に入学して間もない 4 月に行い、ここから復興教育がスタートすることになる。当時の状況を学ぶこと、田老に住む一人として、自分は何ができるのかを考えさせることを目的として、震災の翌年から校内に設置されている震災資料展示室「ボイジャー」の見学と合わせて、校長先生、震災当時から本校で勤務する校務員の方からお話を聞く時間を設定している。

**(2) 田老を語り伝える会**

視点②③④に関わる学習活動である。震災講話で語られた「将来 1 つでも 2 つでも助かる命がある。そのために震災を語り継ぐ」ということを踏まえて、他者に「伝える」活動を行う。また、伝えるために改めて「学ぶ」ことを重視し、時間をかけて生徒たちは台本を準備した。震災当時はまだ幼かったため、当時の記憶がほとんどない生徒も多く、そのため、インターネット、ボイジャー室の資料活用など、さまざまな資料を通し震災や田老の歴史を学びなおした。また、生徒が保護者や地域の方を対象にアンケートを行い、当時の様子や防災に対する考えなどを多く知ることができた。保護者からは、「震災についていつか自分の子に話さなければならぬとは思っていたが、アンケートはそのよい機会であった」という意見もいただいた。これらの活動を通して、生徒たちが「田老を語り伝える会」の原稿をまとめ、さまざまな機会をとらえて外部に発信した。

ア 他校の中学生との交流

今年度、2 年生は、八幡平市の西根一中と盛岡市の城西中と交流会を行った。

西根一中とは 7 月に本校を会場として行い、「田老を語り伝える会」をはじめ、各校の交流とおして、田老の震災やそのときの様子、お互いの考えを交流したり深め合ったりすることができた。

9 月には復興教育スクールの支援を受けたことで、盛岡市の城西中学校を訪問、交流会を実施し、その中で「田老を語り伝える会」を行うことができた。

生徒たちは緊張しながらも真剣に取り組み、これまでの自分たちの学びを十分に伝えることができたと思う。また、生活の文化の違いや、震災について意見交換することで、お互い防災に対する意識をより高め合うことができた。



また、3年生は今までの復興教育の集大成として、4月の修学旅行で神奈川県私立自修館中等教育学校を訪問し、「田老を語り伝える会」を行った。その後、自修館中等教育学校の校長先生から「真剣な語りに、本校生徒たちもジッと聞き入っていた。当たり前な日常がどれだけ素晴らしいことか、私たちも感謝の気持ちを忘れず生きていこうと思います(抜粋)」といった感想を寄せていただいた。



イ ユネスコ運動岩手県大会宮古大会における発表

10月に田老のグリーンピア三陸みやこを会場としてユネスコ宮古大会が行われた。その際に2年生が「田老を語り伝える会」を行う機会をいただいた。同じことを同じように伝えるのではなく、以前の発表を自分たちでふりかえり、他にも私たちが語り継いでいかなくてはならないことは何かを考え、事前に台本を練り直したり、自分たちの想いがより伝わるよう表現のしかたを工夫したりと、よりよいものになるように準備をした。



(3) 文化祭での生徒会企画劇の発表

視点③④の学習活動である。生徒会企画劇は田老防波堤建設の礎を築いた関口松太郎を主人公に、平成25年度から文化祭で発表されてきており、毎年内容や場面を新たにしながら、故郷について知り、先人の想いに触れることを通して、命を守ることの大切さや復興の担い手の自覚を高めることを大きなねらいとして取り組んでいる。今年度は田老の現在と未来、これからのふるさと田老を描いたものになった。講師の先生として演劇のプロの方々をお招きして、事前に3回にわたって演劇ワークショップを計6時間行った。

脚本、役者、演出、照明、音響全てを生徒会執行部が中心となり、生徒たちが試行錯誤しながら全員で創りあげた。そこには、いままでの復興教育で学んだ多くのことがらが反映されている。





（4）学校外と連携した授業

視点①②の学習活動である。さらに深く震災や津波について知るために、より専門的な学習の場を設定した。

ア 岩手大学との共同授業

震災以降、毎年9月に岩手大学の集中講義として、本校を会場として行われており、授業には全校生徒が参加している。岩手大学理工学部の先生から「田老の防潮堤の歴史と今」という題で講演をいただき、その後岩手大学の学生とのグループディスカッションを行い、防潮堤の持つ課題を解決する方向で自分たちのできることを考える活動を行った。田老にとって防潮堤は身近なものではあるが、だからこそ自分たちが知り、考えておかなければならないことについて学ぶことができた。



イ 地域人材の活用

2年生の震災学習では、田老町漁業協同組合の方を講師として招き、学習会を行った。震災当時田老はどのような様子であったか、中学生や大人はどのように考え、行動していたか、震災当時本当に必要なものは何だったかについて学んだ。また、これからの田老に必要なものについて併せて学ぶことができた。生徒たちもこの学習の機会を前向きに捉えており、質疑応答の時間には「震災当時の中学生はどのように地域とかかわっていたのか」「震災前の津波への認識及び防災の取り組みはどのようなものだったか」「これからの復興に向けて、中学生に願うことは何か」など、活

発に質問をしていた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- ・震災のことをより深く知り、これからの自分の生き方を考えていくことができた。
- ・田老を語り伝える会を行うことで、生徒がより深く震災について考え、自分自身を見つめることができた。また、自分たちが復興の担い手として未来を創っていくという意識が高まった。
- ・県中央部および首都圏の中学生との交流によって、震災の実際を伝え、災害に対する意識の向上の一助となることができた。
- ・各学年の取り組みをデータ保存し、次年度へつなげ、また、震災を知らない教員が、震災や復興について学ぶことができた。

2 課題

- ・震災の記憶に乏しい生徒たちに、明確な目的意識を持たせて活動させていくこと。経験に頼った復興教育はすでに曲がり角に来ているため、生徒自らがその必然性を理解して、自分たちが学び、伝えた言葉を、実際の生活の場に置き換えて行動・実践させることが大切であり、主体的に取り組めるように画策していかなければならない。
- ・復興教育を総合的な学習の時間の柱として、3年間を見通した系統性をもたせた年間計画を作成し、1年生では「知る、学ぶ」、2年生では「考える、伝える」、3年生では「活かす」というように、学びを言葉にとどめるだけでなく、段階的に実生活の場で実践させていきたい。
- ・地域人材の意図的、より積極的な活用。震災当時は地域の方々に話を聞くことも憚られたため、本校では積極的に話を聞く機会を持てなかった。しかしある程度時間も経過しており、これから震災を経験しない生徒たちが入学してくることも考えると、先を見越して地域人材を積極的に活用するべきと考えている。また、教職員が震災について学び続けていくことが何より重要であると考えている。